明暗

（上）

夏目漱石

新潮文庫

明暗（めいあん）

上巻

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草10G

昭和二十五年五月十五日 発行
昭和四十四年九月十五日 三十二刷改版
昭和五十一年十二月十日 四十四刷

著者 夏目漱石（なつめそうせき）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四一一
振替東京四—八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊞ 印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Shinchôsha 1950 Printed in Japan

新潮文庫

明暗

上巻

夏目漱石著

新潮社版

99

明暗

上卷

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

一

医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。

「矢張穴が腸まで続いている(一)んでした。この前探った時は、途中に瘢痕(二)の隆起があったので、つい其所が行き留りだとばかり思って、ああ云ったんですが、今日疎通を好くする為に、其奴をがりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです」

「そうしてそれが腸まで続いているんですか」

「そうです。五分位だと思っていたのが約一寸程あるんです」

津田の顔には苦笑の裡に淡く盛り上げられた失望の色が見えた。医者は白いだぶだぶした上着の前に両手を組み合わせたまま、一寸首を傾けた。その様子が「御気の毒ですが事実だから仕方がありません。医者は自分の職業に対して虚言を吐く訳に行かないんですから」という意味に受取れた。

津田は無言のまま帯を締め直して、椅子の脊に投げ掛けられた袴を取り上げながら又医者の方を向いた。

「腸まで続いているとすると、癒りっこないんですか」

「そんな事はありません」

医者は活溌にまた無雑作に津田の言葉を否定した。併せて彼の気分をも否定する如くに。

「ただ今までの様に穴の掃除ばかりしていては駄目なんです。それじゃ何時まで経っても肉の上りこはないから、今度は治療法を変えて根本的の手術を一思いに遣るより外に仕方がありませんね」

「根本的の治療と云うと」

「切開です。切開して穴と腸と一所にしてしまうんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒るようになるんです」

津田は黙って点頭いた。彼の傍には南側の窓下に据えられた洋卓の上に一台の顕微鏡が載っていた。医者と懇意な彼は先刻診察所へ這入った時、物珍らしさに、それを覗かせて貰ったのである。その時八百五十倍の鏡の底に映ったものは、まるで図に撮ったように鮮やかに見える着色の葡萄状の細菌であった。

津田は袴を穿いてしまって、その洋卓の上に置いた皮の紙入を取り上げた時、不図この細菌の事を思い出した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。診察所を出るべく紙入を懐に収めた彼は既に出ようとして又躊躇した。

「もし結核性のものだとすると、仮令今仰しゃった様な根本的な手術をして、細い溝を全部腸の方へ切り開いてしまっても癒らないんでしょう」

「結核性なら駄目です。それからそれへと穴を掘って奥の方へ進んで行くんだから、口元だけ治療したって役にゃ立ちません」

津田は思わず眉を寄せた。

「私のは結核性じゃないんですか」
「いえ、結核性じゃありません」
津田は相手の言葉にどれ程の真実さがあるかを確かめようとして、一寸眼を医者の上に据えた。医者は動かなかった。
「どうしてそれが分るんですか。ただの診断で分るんですか」
「ええ。診察た様子で分ります」
その時看護婦が津田の後に廻った患者の名前を室の出口に立って呼んだ。待ち構えていたその患者はすぐ津田の背後に現われた。津田は早く退却しなければならなくなった。
「じゃ何時その根本的手術を遣って頂けるでしょう」
「何時でも。貴方の御都合の好い時で宜う御座んす」
津田は自分の都合を善く考えてから日取を極める事にして室外に出た。

二

電車に乗った時の彼の気分は沈んでいた。身動きのならない程客の込み合う中で、彼は釣革にぶら下りながら只自分の事ばかり考えた。去年の疼痛がありありと記憶の舞台に上った。白いベッドの上に横えられた無残な自分の姿が明かに見えた。鎖を切って逃げる事が出来ない時に犬の出すような自分の唸り声が判然聴えた。それから冷たい刃物の光と、それが互に触れ合う音と、最後に突然両方の肺臓から一度に空気を搾り出すような恐ろしい力の圧迫と、圧された空気が圧

されながらに収縮する事が出来ないために起るとしか思われない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲った。

彼は不愉快になった。急に気を換えて自分の周囲を眺めた。周囲のものは彼の存在にすら気が付かずにみんな澄ましていた。彼は又考えつづけた。

「どうしてあんな苦しい目に会ったんだろう」

荒川堤(四)へ花見に行った帰り途から何等の予告なしに突発した当時の疼痛に就いて、彼は全くの盲目漢であった。その原因はあらゆる想像の外にあった。不思議というよりも寧ろ恐ろしかった。

「この肉体はいつ何時どんな変に会わないとも限らない。それどころか、今現にどんな変がこの肉体のうちに起りつつあるかも知れない。そうして自分は全く知らずにいる。恐ろしい事だ」

此所まで働らいて来た彼の頭はそこで留まる事が出来なかった。どっと後から突き落すような勢で、彼を前の方に押し遣った。突然彼は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。そうしてその変るところを己は見たのだ」

彼は思わず唇を固く結んで、あたかも自尊心を傷けられた人のような眼を彼の周囲に向けた。けれども彼の心のうちに何事が起りつつあるかをまるで知らない車中の乗客は、彼の眼遣に対して少しの注意も払わなかった。

彼の頭は彼の乗っている電車のように、自分自身の軌道の上を走って前へ進むだけであった。

彼は二三日前ある友達から聞いたポアンカレー（五）の話を思い出した。彼の為に「偶然」の意味を説明してくれたその友達は彼に向ってこう云った。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だという、所謂偶然の出来事というのは、ポアンカレーの説によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸見当が付かない時に云うのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫の配合が必要で、その必要な配合が出来得るためには、又どんな条件が必要であったかと考えて見ると、殆んど想像が付かないだろう」

彼は友達の言葉を、単に与えられた新らしい知識の断片として聞き流す訳に行かなかった。彼はそれをぴたりと自分の身の上に当て嵌めて考えた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣ったり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするように思えた。しかも彼はついぞ今まで自分の行動に就いて他から牽制を受けた覚がなかった。為る事はみんな自分の力で為、言う事は悉く自分の力で言ったに相違なかった。

「どうしてあの女は（六）彼所へ嫁に行ったのだろう。それは自分で行こうと思ったから行ったに違ない。然しどうしても彼所へ嫁に行く筈ではなかったのに。そうしてこの己は又どうしてあの女と結婚したのだろう。それも己が貰おうと思ったからこそ結婚が成立したに違ない。然し己は未だ嘗てあの女を貰おうとは思っていなかったのに。偶然？　ポアンカレーの所謂複雑の極致？　何だか解らない」

彼は電車を降りて考えながら宅の方へ歩いて行った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

三

角を曲って細い小路へ這入った時、津田はわが門前に立っている細君の姿を認めた。その細君は此方を見ていた。然し津田の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直った。そうして白い繊い手を額の所へ翳す様にあてがって何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄って来るまでその態度を改めなかった。

「おい何を見ているんだ」

細君は津田の声を聞くとさも驚ろいた様に急に此方を振り向いた。

「ああ吃驚した。――御帰り遊ばせ」

同時に細君は自分の有っているあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎ掛けた。それから心持腰を曲めて軽い会釈をした。

半ば細君の嬌態に応じようとした津田は半ば逡巡して立ち留まった。

「そんな所に立って何をしているんだ」

「待ってたのよ。御帰りを」

「だって何か一生懸命に見ていたじゃないか」

「ええ。あれ雀よ。雀が御向うの宅の二階の庇に巣を食ってるんでしょう」

津田は一寸向うの宅の屋根を見上げた。然し其所には雀らしいものの影も見えなかった。細君はすぐ手を夫の前に出した。

「何だい」
「洋杖」
津田は始めて気が付いた様に自分の持っている洋杖を細君に渡した。それを受取った彼女は又自分で玄関の格子戸を開けて夫を先へ入れた。それから自分も夫の後に跟いて沓脱から上った。
夫に着物を脱ぎ換えさせた彼女は津田が火鉢の前に坐るか坐らないうちに、また勝手の方から石鹸入を手拭に包んで持って出た。
「一寸今のうち一風呂浴びていらっしゃい。また其所へ坐り込むと臆劫になるから」
津田は仕方なしに手を出して手拭を受取った。然しすぐ立とうとはしなかった。
「湯は今日は已めにしようかしら」
「何故。——さっぱりするから行っていらっしゃいよ。帰るとすぐ御飯にして上げますから」
津田は仕方なしに又立ち上った。室を出る時、彼は一寸細君の方を振り返った。
「今日帰りに小林さんへ寄って診て貰って来たよ」
「そう。そうしてどうなの、診察の結果は。大方もう癒ってるんでしょう」
「ところが癒らない。愈厄介な事になっちまった」
津田はこう云ったなり、後を聞きたがる細君の質問を聞き捨てにして表へ出た。
同じ話題が再び夫婦の間に戻って来たのは晩食が済んで津田がまだ自分の室へ引き取らない宵の口であった。
「厭ね、切るなんて、怖くって。今までの様にそっとして置いたって宜かないの」

「矢張医者の方から云うとこのままじゃ危険なんだろうね」
「だけど厭だわ、貴方。もし切り損ないでもすると」
細君は濃い恰好の好い眉を心持寄せて夫を見た。津田は取り合ずに笑っていた。すると細君が突然気が付いたように訊いた。
「もし手術をするとすれば、又日曜でなくっちゃ不可いんでしょう」
細君にはこの次の日曜に夫と共に親類から誘われて芝居見物に行く約束があった。
「まだ席を取ってないんだから構やしないさ、断わったって」
「でもそりゃ悪いわ、貴方。切角親切にああ云ってくれるものを断わっちゃ」
「悪かないよ。相当の事情があって断わるんなら」
「でもあたし行きたいんですもの」
「御前は行きたければ御出な」
「だから貴方もいらっしゃいな、ね。御厭？」
津田は細君の顔を見て苦笑を洩らした。

四

細君は色の白い女であった。その所為で形の好い彼女の眉が一際引立って見えた。彼女はまた癖のように能くその眉を動かした。惜い事に彼女の眼は細過ぎた。御負に愛嬌のない一重瞼であった。けれどもその一重瞼の中に輝やく瞳子は漆黒であった。だから非常に能く働らいた。或時

は専横と云ってもいい位に表情を恣ままにした。津田は我知らずこの小さい眼から出る光に牽き付けられる事があった。そうして又突然何の原因もなしにその光から跳ね返される事もないではなかった。

彼が不図眼を上げて細君を見た時、彼は刹那的に彼女の眼に宿る一種の怪しい力を感じた。それは今まで彼女の口にしつつあった甘い言葉とは全く釣り合わない妙な輝やきであった。相手の言葉に対して返事をしようとした彼の心の作用がこの眼付の為に一寸遮断された。すると彼女はすぐ美くしい歯を出して微笑した。同時に眼の表情が迹方もなく消えた。

「嘘よ。あたし芝居なんか行かなくっても可いのよ。今のはただ甘ったれたのよ」

黙った津田は猶しばらく細君から眼を放さなかった。

「何だってそんなむずかしい顔をして、あたしを御覧になるの。――芝居はもう已めるから、この次の日曜に小林さんに行って手術を受けていらっしゃい。それで好いでしょう。岡本へは二三日中に端書を出すか、でなければ私が一寸行って断わって来ますから」

「御前は行っても可いんだよ。折角誘ってくれたもんだから」

「いえ私も止しにするわ。芝居よりも貴方の健康の方が大事ですもの」

津田は自分の受けべき手術に就いて猶詳しい話を細君にしなければならなかった。

「手術ってたって、そう腫物の膿を出すように簡単にゃ行かないんだよ。最初下剤を掛けて先ず腸を綺麗に掃除して置いて、それから愈切開すると、出血の危険があるかも知れないというので、創口へガーゼを詰めたまま、五六日の間は凝として寐ているんだそうだから。だから仮令この次

の日曜に行くとしたところで、どうせ日曜一日じゃ済まないんだ。その代り日曜が延びて月曜になろうとも火曜になろうとも大した違にゃならないし、又日曜を繰り上げて明日にしたところで、明後日にしたところで、矢張同じ事なんだ。其所へ行くとまあ楽な病気だね」

「あんまり楽でもないわ貴方、一週間も寐たぎりで動く事が出来なくっちゃ」

細君は又ぴくぴくと眉を動かして見せた。津田はそれに全く無頓着であると云った風に、何か考えながら、二人の間に置かれた長火鉢の縁に右の肘を靠たせて、その中に掛けてある鉄瓶の蓋を眺めた。朱銅の蓋の下では湯の沸る音が高くした。

「じゃどうしても御勤めを一週間ばかり休まなくっちゃならないわね」

「だから吉川さんに会って訳を話して見た上で、日取を極めようかと思っているところだ。黙って休んでも構わないようなもののそうも行かないから」

「そりゃ貴方御話しになる方が可いわ。平生からあんなに御世話になっているんですもの」

「吉川さんに話したら明日からすぐ入院しろって云うかも知れない」

入院という言葉を聞いた細君は急に細い眼を広げるようにした。

「入院？　入院なさるんじゃないでしょう」

「まあ入院さ」

「だって小林さんは病院じゃないって何時か仰ゃったじゃないの。みんな外来の患者ばかりだって」

「病院という程の病院じゃないが、診察所の二階が空いてるもんだから、其所へ入いる事も出来

るようになってるんだ」

「綺麗？」

津田は苦笑した。

「自宅よりは少しあ綺麗かも知れない」

今度は細君が苦笑した。

五

寐る前の一時間か二時間を机に向って過ごす習慣になっていた津田はやがて立ち上った。細君は今まで通りの楽な姿勢で火鉢に倚りかかったまま夫を見上げた。

「又御勉強？」

細君は時々立ち上がる夫に向ってこう云った。彼女がこういう時には、何時でもその語調のうちに或物足らなさがあるように津田の耳に響いた。ある時の彼は進んでそれに媚びようとした。ある時の彼は却って反感的にそれから逃れたくなった。何方の場合にも、彼の心の奥底には、「そう御前のような女とばかり遊んじゃいられない。己には己でする事があるんだから」という相手を見縊った自覚がぼんやり働らいていた。

彼が黙って間の襖を開けて次の室へ出て行こうとした時、細君は又彼の背後から声を掛けた。

「じゃ芝居はもう御已めね。岡本へは私から断って置きましょうね」

津田は一寸振り向いた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com